

軽種馬の生産・育成ステージ

- 軽種馬は、主に3月～5月に生産牧場で出生し、生産牧場や育成牧場等での約2年間の育成期間を経て、中央、地方競馬のトレーニングセンター、競馬場に入厩し、レースに出走。
- 軽種馬は、各ステージ(当歳、1歳、2歳)において、セリ市場又は相対(庭先)で取引。



1

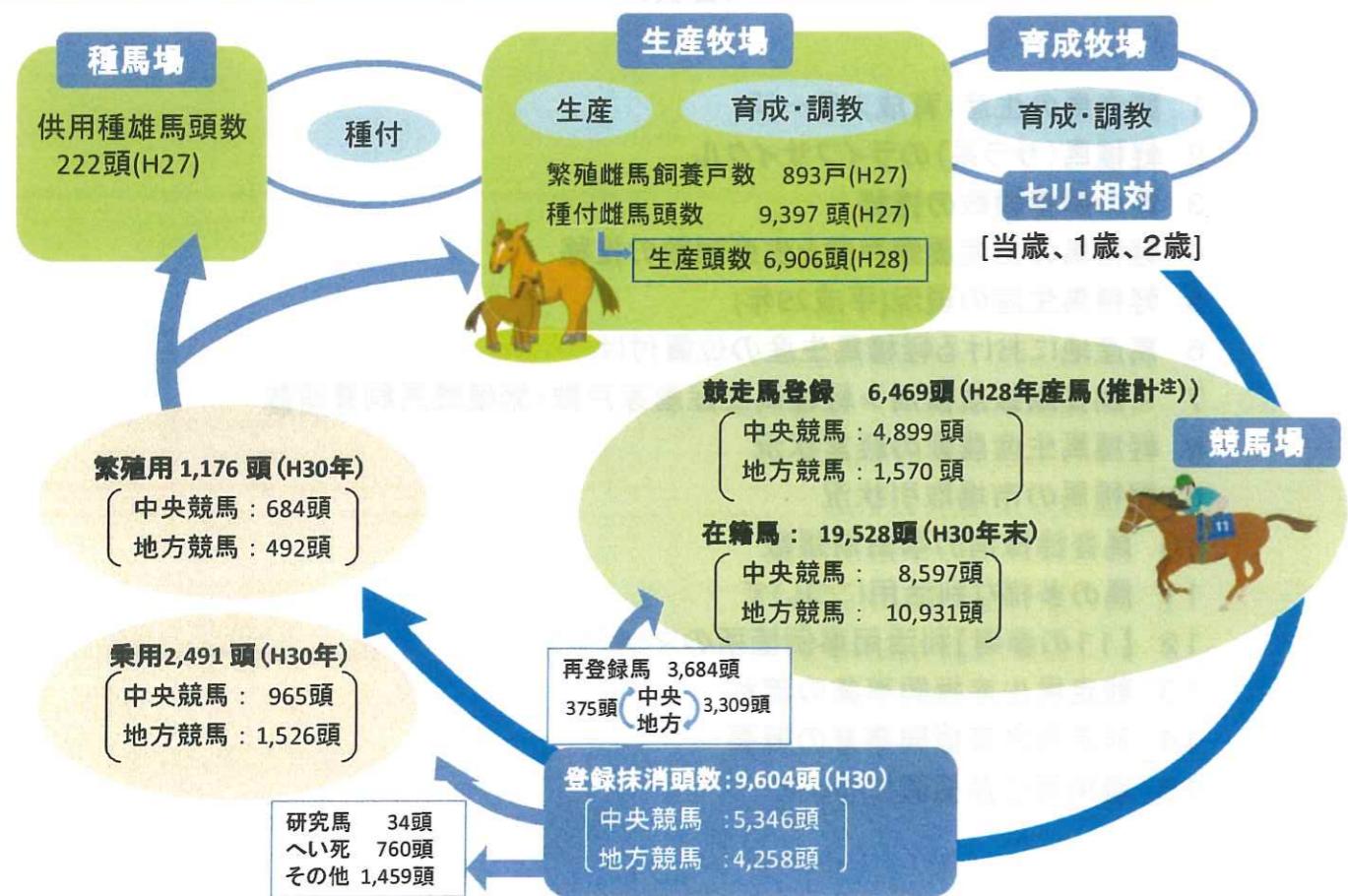
馬の飼養頭数の推移

- 馬は品種や体格等により、競走用、乗馬用あるいは肥育用等の様々な目的で飼養されており、H29年の全国の馬の飼養頭数は74,660頭。
- このうち、主に競走用に利用される軽種馬頭数は41,959頭で、総飼養頭数の約56%を占めており、直近ではやや増加。
- 軽種馬頭数のうち競走用に登録されている頭数は18,404頭で、総飼養頭数の約25%であり、直近ではやや増加。



3

軽種馬(サラ系)のライフサイクル



資料:種馬場及び生産牧場における戸数・頭数は「2017 軽種馬統計」(公財) ジャパン・スタッドブック・インターナショナル、(公社)日本軽種馬協会、その他の登録頭数等は日本中央競馬会、地方競馬全国協会調べ
注:H28年産馬の3歳時における登録馬頭数については、未集計であることから、H27年産馬の3歳時における登録馬頭数を仮置きしたもの。

2

軽種馬の生産農家戸数と生産頭数の推移

- 生産農家戸数は減少傾向で推移。特に、1～10頭の小規模農家が減少する一方で、1戸あたり平均繁殖雌馬飼養頭数は増加。
- 繁殖雌馬頭数及び生産頭数は、直近ではやや増加。



4

馬鼻肺炎とは

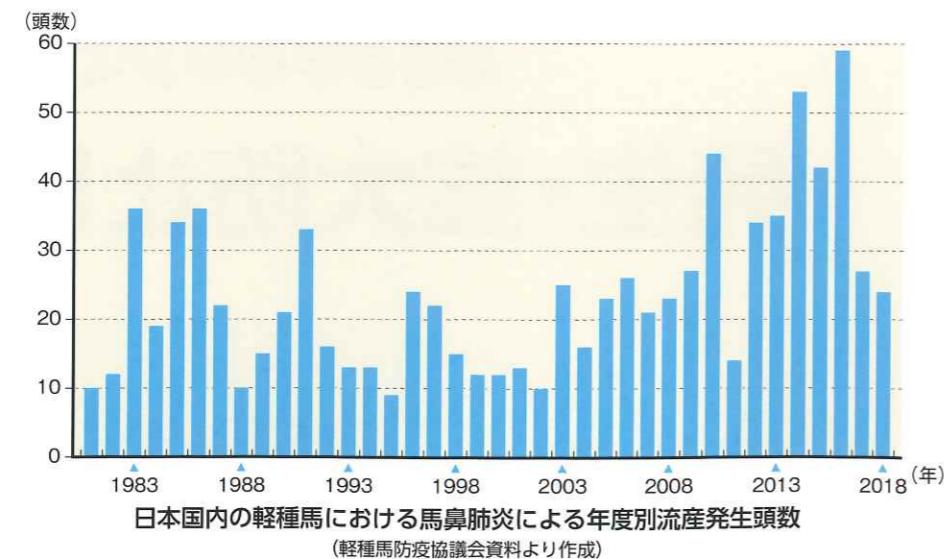
- 馬鼻肺炎は、ウマヘルペスウィルス1型(EHV-1)又は4型(EHV-4)によって起こる感染症です。
- EHV-1は、若齢馬の呼吸器病、妊娠馬の流産の原因ですが、まれに神経疾患を起こすことがあります。
- EHV-4は、若齢馬の呼吸器病の原因ですが、まれに流産を起こすことがあります。
- **馬鼻肺炎による流産は、妊娠後期に発生し、生産農家に重大な経済的損失を与えています。**



馬鼻肺炎の感染様式

馬鼻肺炎ウィルスは、鼻腔から飛沫感染

- ウィルスは鼻汁中に排出され、飛散した飛沫により周囲の馬に感染を広げます。
- 感染馬の鼻などを触った手や鼻捻子、衣服などを介して感染することもあります。
- ウィルスは、一旦感染するとリンパ節や神経に**生涯潜伏**し、ストレスなどが原因でウィルスが再活性化して**再発症**することがあります。
- 生産地の育成馬では、季節に関係なくEHV-4感染による呼吸器病の発生が認められます。
- 馬鼻肺炎ウィルスによる流産の場合には、流産胎子の臓器に多量のウィルスが含まれています。
- 羊水にも多量のウィルスが含まれており、羊水で汚染された人や物を介して他の妊娠馬に感染を広げてしまう危険性があります。



流産が発生したら

消毒を徹底しよう！

- ウィルスや細菌を拡散させないように流産胎子及び敷料などは、ビニール袋等へ入れ、速やかに家畜保健衛生所へ連絡して指示を受けてください。
- 流産馬の馬房、器具、作業着、作業靴など羊水で汚染された可能性のある全てのものの消毒を速やかに徹底して実施してください。
- 流産馬は、他の馬から可能な限り速やかに隔離して、管理も別に行ってください。



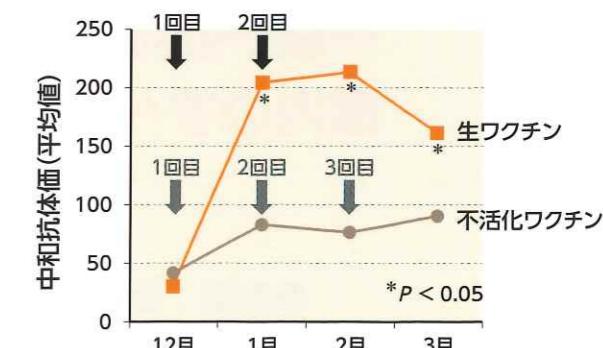
＼流産馬は隔離して、他の妊娠馬を守ろう！／

馬鼻肺炎ワクチンの助成対象は令和2年度から、生ワクチンのみになります。

生ワクチンは

- 極めて安全です。
- 生ワクチン接種群は、不活性ワクチン接種群と比べて、強い免疫応答が期待されます。
- 集団接種により、同一牧場内での続発予防効果が期待できます。

馬鼻肺炎ワクチン接種馬の中和抗体応答



生ワクチンを接種(2回)した競走馬の血清中の中和抗体価は、不活化ワクチンを接種(3回)した馬に比べて有意に高い。
(Bannai et al., 2019. BMC Vet. Res. 15: 280)